

「想像力の育成」を目指す

学習指導の意義と方法

広島大学大学院教育学研究科教授

田中 宏幸

1. 研究の意義と課題

今、改めて注目される「想像力」—これからの時代を生きる子どもたちに求められる力

(1) 新高等学校学習指導要領との関係性

総社南高校国語科が設定した研究テーマ「想像力の育成」は、「未来を見据えた能力を育てる」という大きな意義をもつものである。

新高等学校学習指導要領（平成25年度より年次進行で実施）では、小学校及び中学校との系統性を重視し、国語科の目標に「想像力を伸ばす」という記述が加えられた。『解説』（平成22年6月）には、思考力及び想像力の定義、小・中学校との系統的発展性について、次のように述べられている。

「思考力」とは、言語を手掛かりとしながら物事を筋道立てて考える能力であり、「想像力」とは、物事を心に思い浮かべたり、推し量ったり、予測したりする能力である。小学校及び中学校ではこれらを「養う」としていたものを、高等学校では「伸ばす」としている。

思考力を伸ばすとは、物事の筋道が分かるという段階から更に進んで、問題を解決しようとする創造的かつ論理的な思考力を身に付けることである。

想像力を伸ばすとは、実際には見たり経験したりしていない事柄などを頭の中に思い描く段階から更に進んで、様々な資料を基に、これから起こるであろうことやどのように行動すればよいのかということを読み描くなど、将来の状況やあるべき姿を予測したり、見通しをもって行動したりすることの能力までを含めて身に付けることである。

従前、物事を深く、広く、豊かに感じ取りかつ味わうことのできる能力を身に付けることを求めた「心情を豊かに」するの部分に、想像力を伸ばすことも含めて示していたが、今回の改訂では、小学校及び中学校における指導を踏まえ、高等学校段階における想像力には、物事の微妙なところまで感じ取る情動的な側面のみならず、根拠に基づき先を見通すなど、論理的な側面もあること、そして、そのような想像力を一層発展させる必要があることを明示した。なお、想像力を伸ばすことと心情を豊かにすることとを併せて示すことで、豊かな感性や情緒をはぐくむ指導を一層重視することになる。（『解説』p. 10／太字及び下線は引用者による）

このように今回の改訂で、「想像力を伸ばすこと」についての記述が加えられているのはなぜか。10年後、20年後にどのように変化しているか分からない未来社会を生きていくには、基盤となる知識を活用しながら、次に起こる事態を想定して対応していく力が必要となるからである。また、人間関係が複雑化している今、お互いの心を想像することで、より深く理解しあっていかなければならないからである。

これからの時代を生きる子どもたちには、「思考力」（言語を手掛かりとしながら物事を筋道立てて考える能力）とともに、「想像力」（物事を心に思い浮かべたり、推し量ったり、予測したりする能力）をはぐくむことが求められる。論理的にものごとを考えるとともに、豊かな感性や情緒をはぐくむことが一層重視されているのである。

総社南高校の研究テーマは、この両面を伸ばす具体的な指導方法を開発しようとしている点で、大きな意義をもつものであると言える。

(2)「想像力」を広い概念で捉える

「想像力」は、一般的には「イメージする力」すなわち「未経験の事柄などを思い描き、微妙なところまで感じ取る力」として理解されている。だが、先の『解説』にも示されていたように、このような心情的側面だけでなく、「根拠に基づき、予測し、先を見通す力」という論理的側面もあることに目を向け、広い概念で捉えるようにしたい。高等学校の段階では、推論したり、反論を予想したり、仮説を設定したりしながら、複数のアイデアを組み合わせる新しいものを生み出す力を育てていくことが求められているのである。

では、国語科の学習指導では、「想像力」は、それぞれの文種とどのように関わっていると考えればよいのだろうか。文種を「文学的文章」「論理的文章」「実用的文章」の三種に分けるならば、次の表のように整理できるであろう。

文種	想像力	イメージする力	根拠に基づき予測する力
文学的文章	小説	場面の理解 心情の理解	自己と重ね合わせ、自分の考えをもつ 筆者（語り手）の意図を読む
	随筆	抽象的な語句の具象化 事例の想起	
論理的文章	評論		主張と根拠を読み取り、吟味する 筆者の主張を敷衍し、活用する
実用的文章	手紙	「器」としての働き（内容は多彩。文学も論理も説明・記録も）	
	記録・報告	目的・相手を想定した伝達（内容の分析・整理・構造化）	

文学的文章教材（小説等）の場合は、場面や心情を理解する学習を通して「イメージする力」を養うとともに、登場人物と自己とを重ね合わせて自分の考えを持ったり、作品構造や述べ方を手掛かりに筆者（語り手）の意図を読み取ったりする過程で、「根拠に基づき予測する力」を養うことになる。

論理的文章教材（評論等）の場合は、抽象的な語句を具体化したり、事例を想起したりすることが「イメージする力」を養うことにつながる。また、主張と根拠を吟味する学習や、筆者の主張を敷衍し活用していく学習が、「根拠に基づき予測する力」を養うことにつながると考えられる。

実用的文章教材は、「書くこと」を中心にして考えれば、「手紙」は「器」としての働きをするものと見なすことができる。手紙の形式を借りながら、心情や事情を語ることもあれば、手順を説明することもあるように、内容としては、心情的側面と論理的側面の両面をもちうるものだと言える。また、「記録や報告」の場合、目的を明確にし、相手を思い浮かべながら、内容の整理をしていくことが、「想像力」と「思考力」の育成につながることになる。

国語科は、言語の教育を行う教科であるから、指導内容に、技能的側面・価値的側面・態度的側面などが総合的に盛り込まれており、目指すものも多岐にわたっている。しかも、これらを知識として身に付けるだけでなく、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の三領域にわたる「言語活動」に取り組ませながら、それぞれの指導事項を定着・向上させていくことが求められている。

だが、これまでの高等学校国語科の授業が、こうした要請に十分応えられるものになっていたかどうかは、残念ながら疑わしいところがある。旧態依然とした教室では、一方的な講義や一問一答式問答で授業が進められ、知識を伝授することに重点が置かれがちであった。こうした状況を改善して、「生徒が課題意識をもち、探究していく授業」を構築していくことが求められている。さらに、高等学校の教材の質の高さを考えると、それぞれの教材の特性を生かしながらどのように「想像力」を伸ばしていくかが、重要な研究課題となる。

2. 指導方法について

「論理的想像力」を伸ばすには、どのような学習を仕組んでいけばよいのであろうか。授業づくりの基本に戻って、「指導目標（ねらい）の明確化」「学習形態の改善」「発問類型の検討」という三つの角度から考えていきたい。

（1）指導目標（ねらい）の明確化

「論理的な想像力」とは、具体的にはどのような思考様式を指すのであろうか。「言語活動」に取り組んでいく際に、どのような思考様式を用いているかを整理するために、山元悦子の論考（山元悦子他『新訂国語科教育学の基礎』溪水社、2010年、242頁）を見てみよう。山元は、「思考様式」を6つに整理している。

	思考様式	具体的言語活動例
1	主張・理由・根拠で考える	主張・理由・根拠で諸意見を整理する。 三角ロジック図を用いて整理する。
2	比較・分類・構造化	マッピングを広げ、出たアイデアを構造的に整理する。 いくつかのことから共通するものを取り出したり共通点で束ねる。
3	縦思考（具体と一般の往復）	具体化と一般化。抽象のレベルの上げ下げ。 全体から俯瞰する（例：学級の問題を学校全体の視点から捉える）。意見を束ねた上で、見出しや意見をくくる言葉を考える。
4	推論	相手と意見が違うときは、相手の意見の意図を推測し、もっと詳しくわかり合おうとする。
5	多面的思考	それまでになかった視点を出す。「〇〇の立場から見ると」、「逆から言うと」と考えていく。
6	分析	話題を分析・分節化して捉え、それぞれ順序立てて考えていく。課題追究のために何を話し合えばいいか手順をいくつかに分けて整理する。

あるいは、まだ試案（私案）の段階であるが、思考様式を次のように整理することもできる。

	思考様式	和語的表現	事例
a	具象と抽象	広げる／束ねる	具象⇔抽象／帰納⇔演繹／例示⇔定義（ネーミング）／要約
b	関係づけ	つなぐ・結ぶ	比喩・たとえ／因果関係／相関関係／推理・推論／条件・仮定
c	比較・分析	比べる・分ける	対比・類比／分析（細分化）／分類（類別）・グルーピング
d	複眼的思考	覆す	多面的・複合的に見る／否定と肯定／弁証法（止揚）／逆思考
e	構造化	整える	順序立て／上位概念と下位概念／階層化

このような試案段階では、「思考力」と「想像力」の差異も明確ではなく、思考様式も整理できているとは言えないが、ともかくも今は、学習指導要領解説に示された定義やこうした試案を手掛かりにしながら、指導目標を明確にし、その言語活動でどのような「思考力」や「想像力」が鍛えられるのかを常に意識していくようにしていきたい。

（２）学習形態の改善

「論理的想像力」を伸ばすには、「学習形態の改善」も重要な要素となる。生徒が一方的な聞き手となるのではなく、双方向型の学習形態を取り入れることによって、常に「学びの主体」となっていくようにしなければならない。そのためには、問題意識の喚起（課題意識の明確化）、学習方法（課題解決方法）の具体化、小集団学習や意見交流の場の設定、調べ学習の導入、板書やワークシートの活用による思考の可視化、発表様式の工夫等の改善が必要となる。

総社南高校国語科のこの二年間の５回の研究授業を振り返ると、実に多彩な授業方法の改善がなされてきた。なかでも、次の７点に注目したい。

- ①「班活動（４名）の導入」及び「凸型座席配置」によって、一人ひとりに役割をもたせ、学習への集中度を上げたこと。
- ②「班活動における課題設定の明確化」によって、協同でベストアンサーを追求するクローズエンド型の活動か、対立意見の交換を行うオープンエンド型の活動を明らかにしたこと。
- ③「マッピング法」を取り入れ、発想の拡充や内容の整理に活用したこと。
- ④「リライト作文」によって、理解した内容を言語化させる支援を行ったこと。
- ⑤「複数教材の比べ読み」によって、多面的に物事を捉えるように導いたこと。
- ⑥「構造的な板書」や「ICT機器による既習内容の図解と提示」によって、前時までの学習内容との関連や全体と部分の関係を意識させ、問題意識の共有を図ったこと。
- ⑦「発表用ボード（A3サイズのホワイトボード）」を班での意見の集約に活用し、班活動の集中度を高めたこと。また、プレゼン時の資料としても活用し、全体学習を円滑に進行できるようにしたこと。

こうした学習形態の改善によって、次のような思考が育てられたと見なすことができる。

	学習形態	育てられる思考様式	実践分野	研究・公開授業日
I	班活動	4 推論	現代文分野（俳句・短歌）	H22. 9. 15
II	マッピング	2 比較・分類・構造化	現代文分野（小説）	H22. 11. 5
III	リライト作文	5 多面的思考	古文分野（歌物語）	H23. 1. 25
IV	具体例の想起 課題解決法探究	3 縦思考（具体化）	現代文分野（評論文）	H23. 6. 30
		3 縦思考（一般化）		
V	比べ読み	1 主張・理由・根拠で考える	現代文分野（評論文）	H23. 11. 30

（3）発問類型の検討

最後に「発問」について考えておこう。授業においては、教師からの働きかけ（問いかけ）がないところで、生徒が自発的に思考し始めるということはほとんどあり得ない。どのような学習形態をとることになっても、「発問」は、授業の質を高めるのに重要な役割を果たすものである。

問題解決型の授業を構築する際の「発問類型」を考えてみると、主なものとして次の4つの型を挙げることができる。

①「What型」発問—「どういう意味か」と本質を求めていく問い

「具体的には?」「例えば?」と事例を挙げさせたり、「つまり、ひと言で言うと?」と要点をまとめさせたりする問いである。「こうした事例を一般化すると?」と、敷衍して考えさせる場合もある。上記の「(a)具象と抽象の思考様式」に関わる問いである。

また、「何かに喩えると?」と比喩を用いる場合もある。未知の概念を既知のものに喩えることで理解したり、表現したりする思考を促す問いである。

②「Why型」発問—「なぜそうするのか」と原因・理由・根拠を求めていく問い

「なぜ?」「どうして?」「そのわけは?」などは、因果関係を明確にさせようとするときや、生徒の発言内容に論の飛躍があるときによく用いられる。上記の「(b)関係づけの思考様式」に関わる問いである。なお、この問いは、「理由づけ・関係づけ」を求めているのか、「根拠の提示」を求めているのかが曖昧になりがちなので用心する必要がある。

また、「不確かな前提」や「隠れた前提」を明らかにしようとしたり、「不適切なサンプリングとっていないか」と吟味したりする場合にもこの型の問いが用いられる。

さらに、この問いは、「(c)比較・分析の思考様式」や「(e)構造化の思考様式」とも関わっている。「(c)比較・分析」では、「共通点は何か?」「相違点は何か?」「よく似たことが他にはないか?」「細かく分けてみると?（分析）」「いくつかのグループに分けてみると?（分類）」などがその表現様式として用いられる。「(e)構造化」では、「どの順序に並べるか?」「どちらが上位概念か?（二つは同じレベルか?）」「中心点は何か?」「付随的・補足的なものはどれか?」「どれを強調すればよいか?」などが代表的な表現様式である。こうした思考を経て、原因や理由が推察されるようになるのである。

③「How型」発問—「どうするか」と具体的対策を求めていく問い

課題解決型のテーマの場合、具体的な解決策を示さなければ意味がない。創造的な思考は、課題を

解決するための建設的な提案をしようとするところから生まれてくるのである。ただし、ややもすると功利的判断に引きずられ、単にハウツー型の安直な答えを出すことになりやすい。「What型」の問いや「Why型」の問いに立ち戻り、その意味を考えることも疎かにしないようにしたい。

④「If型」発問—「もし…ならば」と想像を広げ類推していく問い

具体的な解決策を考え出すときには、功罪両面から検討したり、その対策が及ぼす影響を想像したりすることも必要となる。「(d)複眼的思考」が求められるのである。この問いは、「想像力」と最も関係が深い問いである。「別の角度から見ると?」「もしも〜でなかったら?」「AでもBでもないとする?」などという問いによって、各種の条件を総合して次に起こりうる事態を想定させたり、発想の転換を促したりして、新しいアイデアを発見できるように導くのである。

3. まとめ

総社南高校国語科が、教科指導パワーアップ事業の指定を受け、共同研究に取り組んだことは、四つの意義をもっていたと言えるであろう。

一つは、「新しい教材の開発と単元づくり」を具現したことである。「比較読み」にも、同一テーマに対する異なる論者の意見を読み比べて、多様なとらえ方の存在に気づかせる「比べ読み」と、同じ筆者の複数の文章を読み比べて、的確な読みや新たな読みの発見を導く「重ね読み」とがあり、目的によって使い分けていくべきことを自覚できるようになった。また、その際、①どのような教材の組み合わせが適切か、②どのような手順で「比較読み」を進めていけばよいか、③「比較の観点」をどのように設定するか、④気づいたこと、考えたことをどのようにまとめさせていくか、⑤各自の表現をどのように交流させていくか、という実践課題があることが明らかになった。これらは、教材ごとに異なるので、いつでもどこでも同じように進めるということとはできない。今回の単元づくりによって、検討課題の所在が明らかになり、一つの授業モデルを創りあげることができたということが大きな成果である。

二つめに、学習形態の改善をはじめとして、指導技術が大きく向上したことである。課題の設定の仕方、班活動の進め方、教具の活用、教材開発、表現方法の支援などに、顕著な改良が見られた。その結果、講義型・一問一答型の授業から、双方向型・生徒参加型の「言語活動」を中心とした授業が実現するようになった。

三つめは、授業研究方法の獲得である。「今日の授業のここがよかった、ここを改善すべきだ」などと感想を述べあうレッスンスタディ型の授業研究ではなく、「授業仮説の設定→授業実践→リフレクション（省察）」というアクションリサーチ型の授業研究法を身に付けることができた。なお、今回の授業改善の成果を検証するには、アンケートやテスト等による「量的検証」だけでなく、生徒の文章表現の分析や教師の観察等による「質的検証」も必要となる。「論理的な想像力」の向上をどのような観点から分析していけばよいか。今後も検討を続けていきたい。

四つめは、共同研究の推進による「同僚性」の向上である。研究授業を創りあげるまでの指導案の検討、メールでのやりとり、公開授業日の準備や運営、批評会での発言などを通じて、総社南高校国語科教職員の協力体制が日増しに向上していくのが感じ取れた。教科指導力の向上とは無縁のように思われるかもしれないが、決してそういうことではない。授業の改善が日常的な話題となり、互いに切磋琢磨していくことこそが、研究推進のエネルギーとなるのである。